2

hina no marebito のまれびと

中高生に「肝高」を教える

演出家・南島詩人　平田大一氏（50）

琉球・勝連城十代目城主を扱った中高生による「肝高の阿麻和利」（肝高とは志高い生き方）公演は20年間で316回、参加者延べ18万人強のロングランのヒットを飛ばしている。だがこれまでの道のりは決して平坦ではなかった。

勝連町（現・うるま市）教育長（当時）の上江洲安吉氏は勝連城の世界遺産登録前に琉球正史『中山世鑑』の〝王府への反逆者〟阿麻和利の汚名を雪ぎたいと思っていた。当時、外間守善法政大学名誉教授が「沖縄最古の歌謡集『おもろさうし』に『気高い阿麻和利様よ、千年も末永く勝連を治め給え』の記述がある。立派な王（按司）だった」と講演。上江洲教育長は「組踊で阿麻和利の名誉回復を図る」と腹を固め、当時30歳と気鋭の平田大一氏に演出を要請。

「各校を回り感触がよかったが12月の稽古初日に集まったのは7人だけ。ゲームで場を盛り上げ『次回は友達を連れて来て』と頼むと徐々に増え、3月本番で150人。観客は親や教師等連日2000人に膨れ、一シーンごとに指笛や歓声が上がった。主役の子は台詞の棒読みだったが空手の演舞が決まるとうおーっと地響きが起こった。子供の感動体験は親を変え、やがて町を変えていった」とは平田氏の弁。

150人の約3分の1は長期欠席生だったが、組踊に出合い、友達ができ、熱中できるものを見つけ、全員が学校へ戻った。

「勝連方式」「肝高メソッド」として高く評価されている所以だ。地域の英雄を題材にした組踊は全国各地で16演目に広がる。平田氏はその現代版組踊推進協議会の会長を務め、「今年は劇聖・玉城朝薫が組踊上演300周年でもあり、沖縄本土復帰50周年の2022年までに総仕上げを行なう」と抱負を語る。

沖縄県文化観光スポーツ部部長、公益財団法人沖縄県文化振興会理事長等を歴任した平田氏の人間再生の原点は郷里、八重山の臍・小浜島にある。子供時代、旧盆に笛、三線、鐘、太鼓で夜徹し演奏。父親が民宿「うふだき荘」を始めると唄やものまねで場を盛り上げた。それらが演出にも生きた。本年8月12日には東京国立劇場大ホールで「肝高の阿麻和利」東京公演がある。

文・写真　山ノ堀正道